平成30年7月19日

日時	平成30年7月17日(火)14:00~16:10
場所	総合文化センター 視聴覚室
件 名	平成30年度 第2回社会教育委員会定例会~西村覺良先生を講師にお迎えして~
出席者	社会教育委員:小栗正敏、羽柴誠、安藤徳善、龍頭美雪、有賀秀雄、 永井研、三浦晶子、吉村美信 講 師:西村覺良 事務局:平林道博(教育長)、大山雅喜(社会教育課長)、足立弘文(中央公民館長)、 遠藤晶子(社会教育課課長補佐)、野田祐作(社会教育課主査) 欠席者:酒井周文、吉田生子、安藤隆宏

1 開会の言葉

小栗 正敏 副代表より

2 挨拶

有賀 秀雄 代表より

先日揖斐川町で日本最高気温を記録したように、何もしていなくても汗が滴るような暑い日が続く中でのご参集、誠にご苦労様です。また、本日は教育長にもご臨席いただき、誠にありがとうございます。思い返せば、生涯学習体系への移行が言われ始めて30年あまりの月日が経ちました。この間、ゆっくりとした歩みですが少しずつ確実に前進していると感じています。生涯学習の柱として「いつでもどこでもだれでも」を合言葉にして①学習機会の提供 ②指導者の確保 ③活動をまとめ、次へ進めていく組織作りということが言われておりますが、①学習機会の提供については、瑞浪市では公民館活動を中心に、様々な試行錯誤がされています。②の指導者の確保については、化石博物館のワークショップにおいて「化石マイスター」の養成講座が開かれるなど、地域特性のある分野で、市独自の方法による裾野の拡大が模索されており、素晴らしいことだと感じます。③活動をまとめ、次につなげていくための組織作りについては、地域・学校・家庭の3者間の連携を深めることを目的とした横断的な組織作りという、新しい考え方も出てきています。以上のように考えてみると、生涯学習の推進はそのまま地域づくり、まちづくりと繋がっているのではないかとも思います。これをふまえ、どんな方向を目指して行きたいのかということを、これからしっかり考えていきたいと思います。本日は、知識と経験豊かな西村覺良先生の話の中からしっかりと学ばせていただきたいと思います。

議題

3 テーマについて

事務局より

第1回社会教育委員会定例会で協議された内容をふまえ、本年度のテーマを「地域・学校・家庭の協働による地域づくりの取り組み~公民館活動を通して~」とすることを提案。承認。

4 講師紹介

事務局より

- (1) 講師: 西村覺良(にしむらかくりょう)氏
- (2) 経歴:公立学校の教員として昭和40年から平成15年まで勤務された。昭和62年から2年間は瑞浪小学校に、平成元年から2年間は瑞浪市教育委員会に勤務され、瑞浪市の学校教育にも生涯学習にも大きく携わられた。定年退職後は岐阜県の社会教育に力を注がれ、現在は岐阜県社会教育委員連絡協議会の会長を務められている。このように岐阜県と瑞浪市の学校教育にも社会教育にも造詣が深い西村先

生に講師をしていただけるのは大変貴重で有難いことである。

5 講演

- (1) 演題:地域・学校・家庭の協働による地域づくりの取り組み ~公民館活動を通して~
- (2) 内容 ※添付の講演資料のとおり(資料に入る前の講話のみ以下に記す)

①はじめに

- ・(小1国語「たぬきの糸車」の学習を地域の方々と行っている事例を紹介しながら) 糸車を回すと実際にどの部分に大きなねじりの力がかかって糸が生まれるのか、障子の穴 からのぞくと中の糸紡ぎの動きがどんなふうに見えるか等は体験してみないと分からな い。糸をつむぐ経験のある地域の方の言葉・動き・実物、そして子どもと地域の方とのや りとりがあってこそ、生きた学習となる。
- ・このような学校と地域、学校と家庭の一体化は、子どもの学びと大人のやりがいの両方を 生む。これが以前よく行われていた。ある時期から学校と地域をしっかり分けようとする 動きが強まり、学校教育と社会教育がきっぱりと分けられた。
- ・生きた学習を子ども達にさせるため、教師が子ども達と向き合う時間をもつため、地域の 住民が生きがいをもつため、地域の文化や伝統をつないでいくためには、学校教育と社会 教育が分かれている場合ではない。今の時代こそ両者の一体化が強く求められている。
- ・今後の教育を考える上で以前は30年後を見通して取り組んでいたが、今は10年後を見通して取り組むのがよいと考えている。
- ・私の生涯学習への取り組みの基盤は、瑞浪の地での4年間にある。では「教育にかかる遍歴」から話していく。※ここから添付の講演資料の中身へ。

6 講演を受けて 質疑応答及び協議

【委員】

社会教育委員がめざす姿を描くように言われた。「どのような瑞浪の地域にしたいか・子ども達にしたいか・・・」を話し合ってから取り組むということについて、市、教育委員会、社会教育委員会がそれぞれで考えていたら話し合い自体が無意味になるのではないか。共有したものがあって、そこから話し合うべきである。

【事務局】

共有する目指す姿として、瑞浪市の市民憲章・総合計画・瑞浪教育プランに示されている。

【講師】

瑞浪市全体の大きな目標は「市民憲章」に示されており、事前に事務局に依頼して送ってもらい読ませてもらった。1つ、郷土を愛し、美しいまちをつくりましょう、1つ、健康で働き、豊かなまちを・・・と示されている。ここに向かって具体を考えていくのであるが、具体策を考えていく側には発想の転換も必要。目標について話し合っていると、どうしても抽象的になってしまう。逆から行く、具体から行くという調査研究をお勧めする。(目標は既に掲げられているので。)実態から発想する。地域の方々の思い、地域に今あるよさ、公民館の頑張り等を土台に考えていく方法があると思う。

【委員】

講演の中でお話のあった"子どもの笑顔を評価基準とする"ということに賛成である。 日吉公民館は地域の少子化を問題と考え、"地域を愛する子ども"の育成に取り組み、地域文化や伝統に触れさせる取り組みをしている。「日吉に残りたいな。」「瑞浪市はいいな。」と感じ、将来東京や名古屋に出て行っても、地域を思い出したり、帰ってくるようになったりすることを願う。学校の統合問題をきっかけにして、地域のよさを伝えるにはどうしたらよいかと切実に考えている。今は地域に学校があり提案や依頼をすれば即応えてもらっている。統合するとそうはいかない。そこに難しさを感じる。

【委員】

地域の伝統や文化の伝承は、ほとんどの市内の公民館が課題としているところだと思う。

【委員】

(地域と学校のつながりについて)学校の要望を地域が受け入れることはあっても、地域が学校に要望することは難しいのが現状だと思う。学校の要望を受けて地域の行事に子ども達を参

加させることはあっても、地域から学校に子ども達に参加してほしいとは働きかけにくい。学校カリキュラムと地域行事のすり合わせをする場はもてないか。

【委員】

7月15日号の瑞浪市広報に、第6次瑞浪市総合計画の前期基本計画施策評価結果が掲載されており、「いきいきと学び心豊かに暮らせるまち〜教育文化〜」の進捗は"おおむね順調"となっていた。どのように実態を確認したのか。そこを明らかにする必要がある。経済性(就労先が存在すること)と居住性(治安、利便性等の面で住みよいこと)というのが、若者が瑞浪に定住するための現実的な条件だと思う。そういったものが足りて、初めて精神的な豊かさを得られるものだと思う。市も様々な施策をとっているはず。社会教育委員としても、それらをもっと学び知っていく必要がある。

【委員】

地域が学校教育の場に入ることについて、そもそも学校サイドにニーズはあるのか。

【委員】

働き方改革に伴ってニーズは高まっている。打合せに時間や労力がかかるが、地域の教育力は高く、子どもたちの成長のために期待するところが大きい。

【委員】

テストの採点など、より実用的な地域の手助けを得ていくことが、協働にむけた取りかかりになるのではないか。現状、学校教育のサポートに入る"地域の人"は何か特別な技術や知識を持っていることが前提になっている気がする。「何か特別な力をもっているから来てほしい。」だと入りづらい。ちょっとした必要性、支援でよいのだと思う。

【委員】

本の読み聞かせや登下校の見守りなどでよいのかもしれない。

【委員】

登下校の見守りについては、特に下校時の見守りが少ないと感じている。

【委員】

個人的に下校時の見守りウォーキングをしていて、二の足を踏んでしまうのは、学校に何も言わずに始めてもいいだろうかということ。学校も子どもも知っているという状態が望ましい。 そういうところをコーディネートする人がいるとありがたい。

【講師】

見守りは定点で行うと効果的ということで「子ども110番」という仕組みがある。そこにいて下さって(定点で)声をかけてくださる。

また、自治会で自主的に組織的に見守るという実践も勧める。定点で声かけのみならず、学校に入ってもらう、自治会活動の中に「子どもの見守り」を組み込んでもらう等。池田小事件を機に、安全の観点から学校の閉鎖性が高まり、学校内部の不可視化が進んだが、多くの人の視線が犯罪を防ぐという側面も大いにあると考える。

【委員】

講演の中に「仕掛け人」という言葉が出てきた。陶でもあのことならこの人に!と思い浮かぶところがある。社会教育委員は自分が動くということよりも、人脈を活用し地域の人材を見つけて活かしてという仕掛けをするということなのだと理解した。

【講帥】

その通り。社会教育委員には3つの強みがある。それは、①行政からの信頼がある、②地域からの信頼がある、③人間関係をもっていることである。それらをフルに使って地域に仕掛けていくことが重要だと考える。

【委員】

瑞浪市と同じように県も社会教育委員は教育委員会が担当していると思っていたが、先日東濃地区社会教育研修会に行ったら、県では環境生活部環境政策課が指導していた。教育委員会ではなく知事部局、しかも「環境生活課」と聞いて、社会教育とつながるのか、この仕組みで社会教育が推進されていくのかと疑問に思った。知事部局が人事も予算も決定しており、行政が政策の深くまで入り込みすぎ、教育委員会の独自性が弱まっているのではないかと懸念する。また、学校の先生は年間を通してカリキュラムや行事がビッシリ詰まっており、気の毒なほど忙しい。新たな事業を増やす隙間をなかなかつくれない中で、地域の人が学校教育にどう関わるかを考えていかなければならない。

【講師】

平成29年度より県の青少年育成の所管が教育委員会社会教育文化課から環境生活部環境生活政策課に移動したことにより、県教育委員会と知事部局の距離が近くなったと感じる。移管は私が思っていたよりかなり早く実行された。これは社会教育にとって推進にあたることだと思う。市民の目から見ると、教育委員会であろうと知事部局であろうと関係ない。現実に社会教育に関わる活動は(知事部局の主管である)地域づくり等とも密接に関連している。社会教育委員として大事なのは市民のニーズを広く的確に吸い上げて提言をしていくことであり、セクションにこだわる必要はない。社会教育委員と知事部局とのへだたりがなくなったのだから、それをうまく活用することを勧める。知事部局が予算を決定するのだから、しっかりとした提言をすれば推進しやすくなるといえる。大事なことは活動や連携の質を上げること。そのためには実践したこと考えたことを確実に次へと引き継いで進んでいくことが欠かせない。

7 まとめとお礼の言葉

有賀 秀雄 代表より

大変暑い中、瑞浪市までお越しいただき、貴重な講演をいただいた西村先生に改めて御礼申し上げます。先生のお話は実践に基づくもので、ご自身の経験や体験が社会教育に存分に生かされていることを感じました。地域・学校・家庭の連携という言葉は非常に綺麗ですが、なかなか具体的で実効的な活動にまでは進んでいかないという難しさを感じています。学校、地域ともに「忙しい」という言葉でブロックしあってしまっているのではないでしょうか。こうした現状から連携を進めていくには、地域が学校に、学校が地域に求めていることを知ることがつの道だと思います。これまでのように、専門知識を持った一部の人が学校教育に参加するのではなく、気軽にみんながちょボラ(ちょっとしたボランティア)をするという協力の仕方がよいと思います。大仰に構えず「短時間であれば」「少しの協力であれば」お手伝いできるという人も参加していけるようにすれば、学校では子どもの笑顔が増え、地域ではお手伝い自体がやりがいや生きがい、生涯学習となっていくのではないかと思います。

本日は、瑞浪市でまず話し合ってほしいこととして、どんな地域にしたいのか、どんな子どもにしたいのか、どんな大人になりたいのか、どんな家庭を増やしたいのかということを示してくださり、目標を共有することの大切さを教えてくださいました。その上で、行政や各種関係団体が青少年の育成やまちづくり等にどのように携わっているのかを知ることは、社会教育委員自身にとって学びとなり、今後の活動を決めていくもとになると思います。

8 閉会の言葉

小栗 正敏 副代表より

9 連絡

いずれも事務局より

- ・8月24日(金)開催の東濃地区社会教育振興研修会への参加について
- ・10月18日 (木)、19日 (金) 開催の東海北陸社会教育研究大会岐阜県大会について 瑞浪市は分科会(19日)で実践発表を行う。
- ・全国社会教育委員連合が発行する「社教情報」について 全国の社会教育の情報が得られるため、研修用として12冊(社会教育委員用11冊+事務局 用1冊)を市費で購入することを伝達。後日届く。(年間2回発行)

(文責 野田)